

東京五輪がやる④

陸上の元祖スーパースター
カール・ルイス

走り幅跳びでは4連覇達成

したのが大きかった



アトランタ五輪陸上男子走り幅跳びで五輪4連覇を達成し、表彰式で両手を上げて観衆にこたえる米国のカール・ルイス＝五輪スタジアム(写真提供:共同通信社)

た。賞金、出場料、広告出演料などが基金で管理され、合法的な金銭授受が実質的に可能となったのだ。その時代の流れの中で成長し、陸上における「元祖スーパースター」となったのがルイスだった。

既に83年の第1回世界選手権で100mなどを制していたルイスには、地元米国での五輪とあって当然のように大きなプレッシャーがかかったが、これよりも簡単に跳ね返した。100mに9秒99で快勝したのをはじめ、200m、400mリレー、走り幅跳びで優勝した。4種目の掛け持ちとあって、走り幅跳びは2回のジャンプだけで優勝を確信すると後はやめてしまう「省エネ」ぶり。余裕を持っていたの4冠は、高校時代から尊敬していたというジェシー・オーエンス(米国)が36年のベルリン五輪で達成して以来、約半世紀ぶりの快挙となった。年収は日本円にして2億円ともいわれ、ルイスは陸上選手が本業だけでリッチになれることを証明してみせた。革命的な選手だったわけだ。

にした。走り幅跳びでも2大会連続優勝を果たし、200mは2位に入った。92年バルセロナ五輪は、走り幅跳びで当時の世界記録保持者だったマイク・パウエル(米国)との一騎打ちを3cm差で制して3連覇を達成。アンカーを務めた400mリレーは37秒40の世界新となった。

最後となった96年は地元米国でのアトランタ五輪だった。35歳のルイスは米国選考会走り幅跳びでぎりぎりの3位に食い込み、この種目だけ五輪代表となった。本番でも、予選は3回目にとパス。それまでの3大会は最初のジャンプであっさり予選通過しただけに、その衰えが懸念された。ところが、決勝では8m50を跳んで快勝し、大観衆をうならせた。個人同一種目の4連覇は五輪史上3人目の偉業となった。

ルイスが先駆者として切り開いた道は、後輩に受け継がれた。21世紀に入り、ウサイン・ボルト(ジャマイカ)が08年北京五輪から16年リオデジャネイロ五輪まで3大会連続で100m、200mの短距離2冠を制して、世界中のファンをうならせた。(後藤英文)

後藤英文 ● ごとう ひでふみ

スポーツジャーナリスト。共同通信社で初代スポーツ専門特派員として1985年秋から2年間、ニューヨークで勤務。MLBワールドシリーズやW杯サッカー、NFLスーパーボウルのほか、夏の五輪などを取材。2013年から5年間、びわこ成蹊スポーツ大学の教授を務めた。

	100m	200m	400R	走幅
1984年 ロンドン	金	金	金	金
1988年 ソウル	金	銀		金
1992年 バルセロナ			金	金
1996年 アトランタ				金

ルイスの得た五輪大会メダル

1984年のロサンゼルス五輪は、五輪史上でも大きな転換期となる大会だった。税金を使わない完全民営化の五輪は結果的に大きな黒字を出して終わり、「商業主義五輪」へのターニングポイントとしてその名を歴史にとどめることになった。そのロス大会で4つの金メダルを獲得したのが陸上男子のカール・ルイス(米国)。1961年7月に、アラバマ州バーミングハムで生まれたスプリンターだった。

2大会前の76年モントリオール五輪が大きな赤字を出して、市民にそのツケが回った。五輪への熱は一気にさめた。84年五輪の候補地はロサンゼルスだけとなり、大会組織委を率いたピーター・ユベロス委員長は税金を使わない方策を次々と講じていった。テレビから巨額の放映権料を取り、1業種1社に絞ったスポンサーを募集。聖火リレーも有料化し、競技施設は既存のものフル活用した。民間からカネを集め、支出では無駄を省く作戦だった。私もこの大会を取材したが、あてがわれた宿舎は地元大学の女子寮。お世辞にもきれいなとはいえない大部屋で、約3週間の共同生活を強いられた。競技会場への移動も米国ではおなじみの黄色いスクールバスだった。

当時は陸上にもプロ化の波が押し寄せていた。それまでは大会への有力選手集めに「ウラ金」も横行していたが、国際陸連(IAAF)が競技者基金を導入

商業主義から生まれた寵児

国際陸連(IAAF)が競技者基金を導入